

所 陵

No. 65

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



カヌー舳先飾板 (Canoe Prow Ornament)

● 目 次 ●

高松塚古墳墳丘の景観変遷 (上)	米田 文孝	2
家相図から暮らしを読み取る	森 隆男	4
歌舞伎役者の乗込	藤岡 真衣	6
出石焼・籠目小鳥細工花瓶について	谷口 弘美	8
大阪の都市遺産と住友	岩田 陽子	10
国府遺跡大串第18号人骨と縄文鉢形土器の穿孔	山口 卓也	12
平成24年度全国大学博物館学講座協議会全国大会の開催について		14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/index.html>

高松塚古墳墳丘の景観変遷（上）

米 田 文 孝

2012年3月、高松塚古墳は発掘調査と彩色壁画の発見から40年を迎えた。古墳は1973年に特別史跡、壁画は1974年に国宝に指定されたが、結果的に壁画の現地保存が困難になり、石室（横口式石槨）を解体して保存修理を実施する目的から、2006年度墳丘の発掘調査が実施された。

この発掘調査では、90～150年周期で襲来した南海・東南海地震による亀裂痕が確認されるとともに、終末期古墳の墳丘構造の解明につながる重要な知見が得られた（図1）。

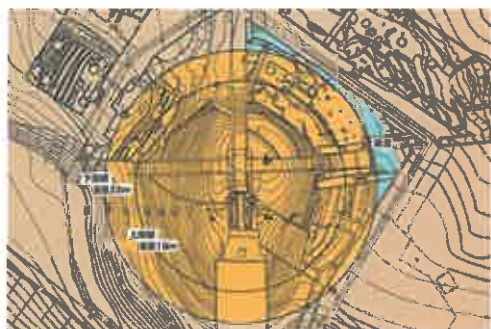


図1 高松塚の平面形と規模

その後、発掘調査の成果に基づき、墳丘は築造当時の姿（二段築成の円墳、下段部直径23m、上段部直径18m）に復元された（写真1）。復元された墳丘の表面には、風雨による墳丘の崩落を防止する目的で芝草が貼られており、当然のことながら樹木はなく、今日における一般的な古墳の墳丘の外観とは大きく異なっている。



写真1 復元された高松塚古墳の墳丘

ところで、大山（仁徳陵）古墳をはじめ、百舌鳥古市古墳群の倭国大王墓と推定されている大型古墳には近世～近代に鳥居や拝所、柵が設置

されて区画され、立ち入りが制限されていることもあり、その墳丘は鬱蒼とした叢林で覆われている。現在、宮内庁の管理下にあるこのような陵墓に限らず、特に都市部では社叢（鎮守の森）と並び、古墳は貴重な緑地として認識されている。しかし、復元された高松塚古墳の墳丘に見るように、現在、我々が目にすることができ古墳の墳丘外観はその築造当初とは大きく異なっている。ここでは高松塚古墳の墳丘外観の変遷過程をみたい。

高松塚古墳は8世紀第一四半期、平城京遷都と相前後する時期に築造されたが、近世の山陵図にその外観が描かれるまで、墳丘外観の変遷を具体的に知ることは困難である。墳丘築成当時の版築による墳丘表面の外装状態については判明しないが、天武・持統陵古墳（檜隈大内陵）や牽牛子塚古墳のように、大小の凝灰岩の切石が八角形に組み合わせられ、その表面が石材で被覆された墳丘構造でないことは明らかである。

檜隈大内陵については、1235（文暦2）年に盗掘されたときの実検記である『阿不幾乃山陵記（御陵日記）』がある。「件の陵の形八角、石壇一匝り、一町許、五重也、此の五重の峰に森十余株有り」と記され、すでに墳丘には10本余の樹木が繁り、古来よりの儀式・慣例の衰退につれて、次第に墳丘が荒廃していく状況を看取できる。この檜隈大内陵の盗掘と相前後して高松塚古墳も盗掘を受け、壁画が毀損されるとともに、墳丘も盗掘坑により南側が部分的に損壊した。

時が流れ、徳川綱吉の時代には文芸復興の気運とともに、陵墓の荒廃が慨嘆されるようになり、元禄・享保・文化・安政・文久年間に山陵図が作成され、必要に応じて修陵が行われた。また、明治期にも山陵図の作成や環境整備が加えられた。

皇陵調査事業の嚆矢である元禄期には、京都所司代松平信庸の命により、南都奉行が絵図と各陵の由来書からなる大和国山陵図を作成・提出した。同じく、大坂城代が河内・和泉・摂津各国の山陵図を作成・提出したという。皇陵の

比定には『延喜式』に登載の陵名を基礎として探索・措定された。檜隈安古岡上陵(文武天皇陵)には比定すべき古墳が見当たらなかったため御陵山(高松塚古墳)が措定され、檜隈大内陵とともに不分明陵と区分された。この1697(元禄10)年の皇陵調査には、前年に刊行された松下見林の檜隈付近の皇陵についての考定(『前王廟陵記』)も影響したのであろう。

このとき、陵墓の書き上げを命じられた平田村(現・明日香村)の庄屋三郎右衛門と年寄孫三郎が南都奉行所に提出した「覚」(元禄十_丁年山陵記録)には、高松塚古墳の位置や規模などが記録されるが、墳丘の外観周囲の状況について、「一 御塚之廻り池又ハ端 籬 等^{まがき}無御座候、一 御塚山ニ立木無御座候 芝山ニ而芝草平田村_江苅來来_リ申候」とあり、墳丘一帯は村民が採草地として利用していたらしい。また、高松塚古墳は檜隈安古岡上陵に当てられたため年貢免除地となり、幕末期(文久の修陵)から明治14年の指定解除にいたる混乱期にも、国有地として旧状が維持される端緒となった。

同じく1697年に大和国内の不分明陵を踏査した奈良(南都)奉行所与力玉井与左衛門・坂川武右衛門が作成した「文武天皇御陵歟」によると、高松塚古墳には松15本が茂り、墳丘の木を伐採すると、ことのほか祟りがあることや、一里塚のような姿に見えたことが記されている。元禄期の高松塚古墳を描いた転写本には、墳丘だけ



写真2 元禄期の高松塚古墳(1) (『大和国陵廟之図』)



写真3 元禄期の高松塚古墳(2) (『大和国御陵図』)

のもの(写真2)と丸垣を加えて描いたもの(写真3)とあるが、墳頂部の松は斜面の松とは樹齢が異なる表現で描かれており、この墳頂部の大木が古墳名の由来ともなったのであろう。

翌1698(元禄11)年には、文武天皇陵として高さ6尺、全周27間(約48.6m)の丸垣が巡らされた。奥書がないため確認できないが、この時の姿を描写した垣仕様付絵図の可能性のある絵図(写真4)を参考にとすると、墳丘裾部に接するように丸垣が設置されていることから、その直径は約15.5m、高さ6.3mを測り、この時点までに墳丘裾部は開墾などで切り崩され、1972年の発掘前の墳丘形態に近い形態であったのであろう。また、墳頂部の松は目通り廻り5尺(直径約50cm)を測ることがわかる。

その後には作成された山陵図をみると、いつしか墳頂部以外の松は姿を消し、墳頂部に大木に成長した一本の黒松が樹立する姿が表現されている。2006年度の高松塚古墳の墳丘調査では、前述したように、地震による亀裂痕に加えて、この大木の直根による版築の攪乱が断面で確認されている(写真4)。

[引用・参考文献は(下)に掲載します]



写真4 墳丘断面に現れた大木の根の痕跡

文学部教授

家相図から暮らしを読み取る

森 隆 男

1 はじめに

調査のため旧家を訪れると、大切に保管されていた家相図を見る機会がある。家相図は陰陽五行説に基づいて住まいの位置や方位、間取りなどの吉凶を判断するために作成された図である。近世後期に長崎貿易を通じて中国から風水に関する書物が輸入され、それをもとに大坂や江戸で家相書が出版されて全国に普及していった。近世末期からは家相書の知識を習得した人々によって家相図が作成されるようになり、明治・大正を中心に流行したが、昭和初期には衰退していく。

家相図には当時の敷地や建物の平面、作成者と作成年月日などが記されている。また火に関わる竈や水に関わる井戸、そしてケガレに関わる便所などが明記されており、現存する住まいの情報を重ねることで生活の変容をさぐることができる。

奈良県生駒市高山町の旧家である尾山一洋家には、大正4年に作成された家相図が残っている。作成者の高阪定一について詳細は不明であるが、「大日本宅相方位鑑定師」の門人と名乗っている。宅地と家相の判断は別の図で示すと記述され、ここには当時の屋敷と母屋、付属屋がそのまま描かれている。とくに母屋の間取りだけでなく土間の設備や付属屋についても詳細に記されており、本稿では、この家相図に記された情報から大正当時の当家で営まれた暮らしの一端を読み取ってみたい。

2 尾山家の概要

尾山家の母屋は茅葺の入母屋造で、現在は瓦風のトタンで覆われている。この建物は明治に2代前の当主が他所のすまいを購入して移築したもので、慶応年間の棟札



写真1 尾山一洋家 外観

があったと伝承されている。

昭和50年ごろに改築されたため外観は新しく見えるが、玄関の大戸や土間の一部に古民家の名残りを見ることができる。土蔵や堆肥舎、納屋、井戸も当初のまま残存している。しかし敷地の南東部に母屋から離して建てられていた風呂と大便所が撤去された。これにより母屋への進入路が南側から南東側へ変化し



写真2 大戸と土間に残る古民家の名残り

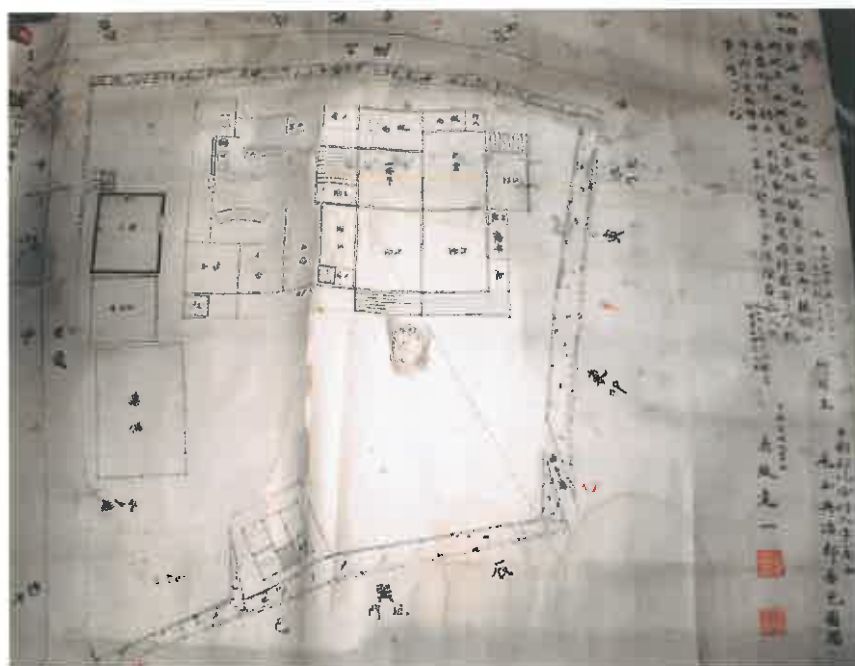


写真3 家相図（大正4年）

た。

家相図に描かれた母屋の間取りは四間取りを基本にしている。オモテ側では玄関の大戸口を入ると広い土間に至るが、竈との間に建具があり、客の視線を遮断している。玄関と3畳、次の間、床の間を備えた客間を結ぶ接客の導線は、日常空間と明確に区別されている。ウラ側では土間に面して板敷きのヒロシキを設けている。ヒロシキは大和・河内地方の農家で一般的に見られ、昼食の場に充てられることが多い。4畳半は居間、6畳とその奥の3畳は寝室である。家財の収納スペースが多いのも当家の特色であろう。

母屋の間取りや、仏壇と神棚の位置に変化はみられない。しかし土間部分には一部を残して床が張られ、水甕と調理場は床上に移された。土間に設置されていた唐臼と、人の食事や牛の飼料の煮炊きに使用されたアーチ型の5穴の大型竈も撤去されている。また「牛欄」と記された厩は改築されて部屋になっている。これに接して軒下に設けられていた小便所も撤去されている。背景には上下水道の普及と燃料の変化がもたらした暮らしの変容がうかがえよう。

3 合理的な部屋と設備の配置

この家相図から、100年間に当家の住まいに施行された主な変更箇所は、土間と付属屋であることがわかる。

まず風呂と大便所が一体になった付属屋から検証しよう。昭和6年生まれの現当主も、このような形態の付属屋については記憶がないという。家相図では赤線が開口部、一重線が壁、二重線が^{かまち}框を示しているので、当時は風呂と大便所は、簡易な扉をつけた程度のオープンな構造であったようである。大便所の窓が記されているので用を足

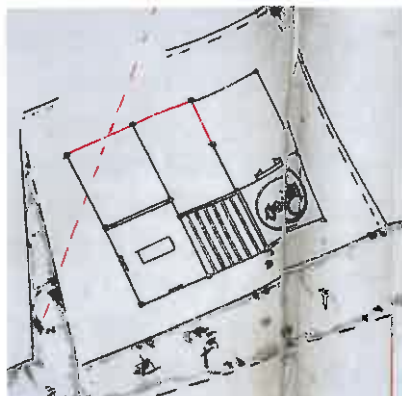


写真4 風呂と大便所の付属屋

るのに座る向きがわかる。風呂と大便所は壁で仕切られている。風呂の焚口の位置も記され、風呂桶と洗い場には煙が流れないように

壁がある。洗い場には板のスノコが敷いてあった。大便所と風呂が同じ付属屋に配置されているのは、使用後の風呂水と洗いを便槽に流し、糞尿を薄めて下肥として利用するためであろう。この付属屋の位置は、隣接する「宅外畑」などに下肥を運ぶ上でも便利であったと思われる。

母屋の厩に隣接して設置されていた小便所には、大型の便槽が埋められている。牛の糞尿を小便所の便槽に導く溝が切られていたと考えられ、やはり下肥として利用する構造が認められる。家族だけでなく来客にも小便を提供してもらう配置でもある。化学肥料が普及するまで、農家の住まいは肥料の生産工場でもあった。

土間に面して食事の場であるヒロシキ、台所道具が収納されていたと思われる物入れ、井戸、厩が配置されている。また土間には唐臼、「走井」(流し)、水甕、竈が設けられている。水甕が井戸の横に置かれているのは水を運ぶ手間を少しでも省くためであろう。すなわち土間で家族の食生活と牛の給餌がほぼ完結することになる。

このように、土間が日常生活の中心であった当時、各部屋や設備がきわめて合理的に配置されていたことを知ることができる。土間の消滅は日常的な暮らしの変化を反映したものといえる。今後、このような視点から、住まいの中で土間がもっていた機能を再検証する必要がある。

4 むすび

都市では大正に入ると生活の改良が始まり、台所や便所などに新しい設備が導入されるようになった。農村でも都市に遅れるものの同様の動きが始まり、第二次世界大戦後に本格的な生活改善運動が展開された。現存する住まいには、すでに半世紀前の暮らしをさぐる情報を見つけることが困難であるといってもいい。家相図の多くはこのような変化の前に作成されており、すでに見ることができない住まいの情報をビジュアルに提供してくれる。

本稿で紹介した尾山家の家相図は、大正当時の住まいが生業である農業と密接に関わった合理的な空間であったことを示している。また日常の暮らしが土間を中心に展開していたことも教えてくれる貴重な史料といえよう。

歌舞伎役者の乗込

藤岡真衣

歌舞伎役者が、一座を組んで興行地に入ること
を「乗込」と呼び、興行の初日を前に、一般
の人びとや後援者へ挨拶をして公演の宣伝をす
る。現在でも、芝居に出演する役者たちが船を
使って劇場へ向かう「船乗込」や、人力車に乗っ
て挨拶をする「町廻り」(お練り)など、各地で
さまざまな形で行なわれている。今年(2012年)、
大阪の道頓堀川で夏の風物誌となっている船乗
込と、香川県琴平町の四国こんびら歌舞伎大芝
居の町廻りを見る機会があった。その様子を紹
介するとともに、江戸時代の様子もたどってみ
たい。

江戸時代以降、道頓堀は、歌舞伎や人形浄瑠
璃を上演する芝居小屋が建ち並んでいたが、現
在は、松竹座だけになっている。毎年松竹座で
行なわれる「関西・歌舞伎を愛する会」の「七月
大歌舞伎」の際には、船乗込をする。

船は、出演する歌舞伎役者や関係者を乗せて、
大川(旧淀川)に架かる天満橋の西側にある八
軒家浜船着場を出発する。東横堀川を南下し、
西に曲がって道頓堀川に入り、戎橋へと向かう
(図1)。賑やかな囃子の音とともに、浴衣姿の
役者が乗った船が近づくと、橋や川岸に集まっ
た人びとから役者の屋号が呼び掛けられる。戎
橋のたもとに着くと、船上で興行の演目と役者
の紹介がある。橋の南詰で船を下りた役者たち
は、松竹座まで練り歩く。紅白の幕が張られた
劇場前で、役者や関係者が挨拶と手締めをして
興行の成功を祈願する。



図1 道頓堀の船乗込

江戸時代の歌舞伎役者は、毎年劇場との間で
10月に1年間の出演契約を結ぶことになってい
た。その最初の11月の公演は、契約を結んだ役
者たちを披露することから顔見世興行と呼ばれ
た。今でも京都の南座の11月末から12月末まで
の公演を、顔見世と呼ぶのはその名残である。
船乗込は、顔見世興行を前にした大坂独特の催
しであった。

大坂の芝居を解説した『戯場楽屋図会』(上巻・
1800年刊)の乗込の項には、毎年10月末に、京や
江戸から来坂して新しく一座に加わった役者たち
が、東横堀の九之助橋から船で道頓堀の芝居小屋
へ向かったことが記されている(図2)。船から
上がって芝居小屋に入った役者たちを、前年度か
ら引き続き舞台を勤める古参の役者が出迎えたの
ち、座本(興行の主催者)と盃事を行なった。

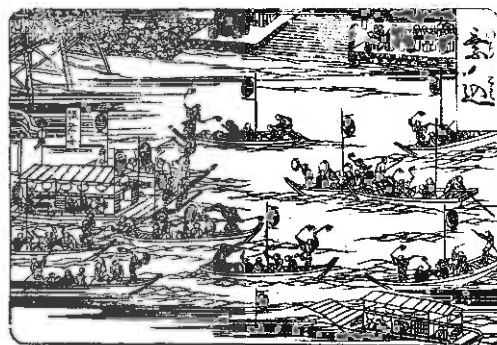


図2 『戯場楽屋図会』(上巻)の乗込の図

船乗込には、役者を迎える船も多く参加した。
安永3年(1774)、初代尾上菊五郎が来坂し、10
月26日に船乗込を行なった。その時の様子を記
した『梅幸集』(1784年刊)の付録「尾上菊五郎
一代狂言記」によると、太鼓持や若手の船が、
役者たちの船を出迎え、「此後大坂乗込の迎ひ
船は凡此幕職なども用ひて是を賑ひの例の始と
なりし程の事ぞかし」とある。また、嘉永7
年(1854)、8代目市川団十郎が来坂し、7月28
日に行なった乗込でも、料理屋・茶屋、轟眞筋
などの大御座船・屋形・茶船、見物船が多数な
らび、その光景はさながら天神祭のようであっ
たという(『近來年代記』第5冊、1851~64年)。

このように、船乗込は顔見世以外の機会にも行なわれていた。これらの文献のほかにも、文久2年(1862)10月に、江戸から帰坂した2代目片岡我童一行の船乗込の様子を描いた「川竹乗込賑」(芳雪画)が残っている。そこには、袴姿の役者が乗った船とともに、迎え船や、役者を見ようとする人で賑わう川岸の様子が描かれている。

明治以降も、初代市川左団次や5代目尾上菊五郎などの船乗込が道頓堀で催された。大正13年(1924)10月31日には、初代中村吉右衛門の一行が、7艘の三十石船で中座まで船乗込を行なった。黒紋付姿の役者たちは、緋毛氈が敷かれた舳先に座して、両岸の最良筋へ挨拶をした(『大阪朝日新聞』1924年、10月31日付、夕刊)。この年を最後に道頓堀川での船乗込は途絶えたが、昭和54年(1979)に「関西で歌舞伎を育てる会」(「関西・歌舞伎を愛する会」の前身)の第1回歌舞伎公演を記念して、55年ぶりに復活し、現在も続いている。

つぎに、香川県琴平町の四国こんぴら歌舞伎大芝居の際に行なわれる町廻りについてみてみたい。歌舞伎が上演される「旧金毘羅大芝居」は、天保6年(1835)に道頓堀の芝居小屋を参考にして建てられたという。建物は昭和45年(1970)に国の重要文化財に指定され、昭和51年(1976)に修復工事が完了し、昭和60年(1985)から毎年歌舞伎が上演されている(図3)。公演の前日には、役者が人力車に乗って町内をまわる「成功祈願町廻り」(お練り)が催される。

出演する役者たちは、公演の2、3日前に琴平に入って打ち合わせや稽古をする。町廻りの当日は、地元の金刀比羅宮を参拝して、興行の成功祈願祭を行なう。役者が町に戻ると、いよいよ町廻りが始まる。地元の小学生が公演の口上を述べ、金刀比羅宮の金棒引や芸妓衆のだんじり囃子などに続いて、役者を乗せた人力車が、町内をまわる。幟がはためく沿道では、役者を一目見ようと集まった人びとが歓声を上げる。

江戸時代、3・6・10月の金毘羅大権現(現・金刀比



図3 旧金毘羅大芝居

羅宮)の祭りには市がたち、歌舞伎などが上演された。役者の一行は船で讃岐に着くと、陸路、金毘羅の門前町をめざす。町はずれで芝居の関係者に迎えられた一行は、町廻りをして芝居小屋に入った(『金毘羅大芝居のすべて—草薙金四郎選集15—』、1985年)。

このような乗込は、江戸時代に安芸の宮島でも行なわれた。厳島神社の旧暦6月17日の祭りには市が立ち、歌舞伎や操り芝居が上演された。『楽屋図会拾遺』(上之巻・1802年刊)の「芸州宮嶋乗込之図」には、大坂から役者たちが宮島へ向かう様子が記されている(図4)。それによると、役者は、6月中旬に大坂を出船して船中で芝居の稽古をし、途中、小浦というところで身支度をして再び船に乗り込む。船上では、役者や囃子方たちが座る前で、子役が三番叟を舞う。そして、幟を立てた50艘もの獵船(漁船)が、役者が乗る船を宮島まで曳いた。役者は船から上がると、銀主(興行の出資者)の家に挨拶をし、さっそくその夜に芝居を上演したという。

乗込の時は、歌舞伎役者を間近で見ることができるまたとない機会であったことは、今も昔も変わらない。

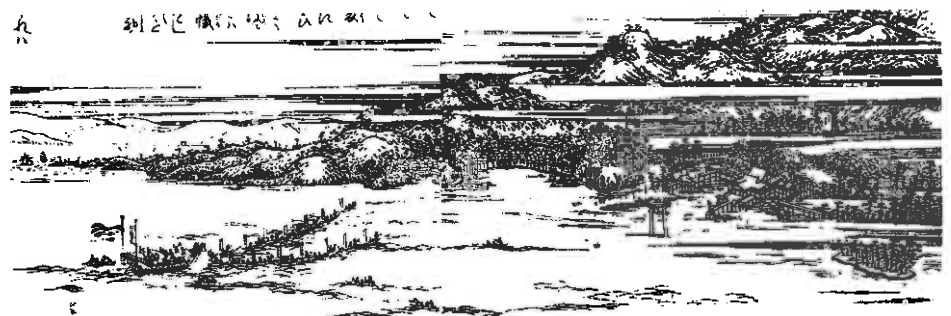


図4 『楽屋図会拾遺』(上之巻)の「芸州宮嶋乗込之図」

出石焼・籠目小鳥細工花瓶について

谷口弘美

1 はじめに

精巧緻密に表現された籠目小鳥細工花瓶(写真1)が、兵庫県豊岡市の出石明治館に展示されている。高さは約35センチで、うっすら灰色味を帯びた釉薬がかかっている籠目状の器形に、ツバメが立体的に装飾されている作品である。当時の出石焼の技術の高さを知ることができよう。本稿では、この花瓶の製作年代と製作者、当時の出石焼をめぐる状況について考えてみたい。



写真1 籠目小鳥細工花瓶
(豊岡市教育委員会蔵)

2 出石焼の歴史

出石焼は天明4年(1784)、伊豆屋弥左衛門が櫻尾(現・兵庫県豊岡市)に開窯したことに始まる。その後、大阪や京都などから職人や技術者などを招聘し試行錯誤をかさねるが、寛政元年(1789)、肥前松浦郡平戸領木原村(現・長崎県佐世保市)の職人・兵左衛門の招聘を期に、本格的な磁器焼成に成功する。江戸時代には山水などが描かれた染付けのやきものが多く生産されていた。

明治、大正期は近代化、産業構造の変革などが行われた時代で、欧米における「ジャポニズム」趣味の影響により日本各地で輸出用の陶磁器がつくられた。出石もその生産地のひとつで、明治9年(1876)には、失職士族の授産と出石焼改良のため「えいしんしゃ 盈進社」が設立され、指導者として肥前松浦郡大川内山(現・佐賀県伊万里市)の

陶匠・柴田善平を招聘した。盈進社では精緻巧妙な作品や輸出用の陶磁器の製作なども手がけるようになり、出石焼の名は広く世に知られることとなった。その後、明治18年(1885)、盈進社は経営難で廃業し、明治30年代には「出石陶磁器試験所」が設立されることになる。

昭和55年(1980)には、国指定の伝統工芸品に指定され、現在も数軒の窯元が陶磁器の生産を行っている。

3 本作品の製作年代と製作者

この花瓶の底には「大日本但馬國出石磁器會社 By The Artist Mr. Yasukiyo Tomoda of Izushi Porcelain Company Tajima Japan」の銘がみられる(写真2)。大日本但馬國出石磁器會社とは明治32年(1899)の県会で補助金500円の交付が決定し、郡、町の補助と当時の出石の業者が出資して出石焼の改良のために設けられた出石陶磁器試験所、もしくは同35年(1902)に併設された出石陶磁器改良会社のことを指す。その後、試験所・会社は同39年(1906)に閉鎖される。

また、銘には友田安清の作とある。友田安清は同32年(1899)の出石陶磁器試験所設立に伴い、指導教師として迎えられた人物で、明治38年(1905)まで約7年間つとめた。

出石での友田安清の滞在期間と試験所・会社の操業期間を考えると、この花瓶の製作年代は明治32年から38年頃であると考えられることができる。



写真2 底の銘(籠目小鳥細工花瓶)

4 友田安清

友田安清(写真3)は、文久2年(1862)、金沢

に生まれた。幼少期から内海吉造、岩波玉山に陶画を、幸野樸嶺、池田九華、岸竹堂に絵画を学んだ。明治15年(1882)に納富介次郎より製陶着画の新法を習い、同18年(1885)に上京して、ゴットフリード・ワグネルより製陶器法や顔料調整法を学んでいる。その後、同20年(1887)、金沢に戻り、金沢工業学校(現・石川県立工業高等学校)の陶画科主任教師をつとめ、同24年(1891)に実弟吉村又男と共に友田組を創設し、洋式顔料と釉薬の製造をはじめめる。そして、明治32年(1899)から38年(1905)まで指導技師として出石に滞在し、美術作品の製作や出石焼の改良につとめた。その後、帰郷し同39年(1906)、林屋組の設立に参加して、硬質陶器の製造に携わり、同41年(1908)、日本硬質陶器株式会社(現・ニッコー株式会社)と改めた後は初代技師長に就任した。大正7年(1918)、57歳で死去する。



写真3 明治45年頃の
友田安清
(石川県立工業高等学校
ギャラリー雪章蔵)

5 友田安清の果たした役割

『但馬雑誌 第九号』(明治32年11月25日発行)にはパリ博覧会に出品した当時の状況が記載されている。

曾て出石陶磁器組合より巴里博覧会へ出品の為め製作中の花瓶出来し神戸へ向て発送せり、今回の出品は出石陶磁器改良教師友田安清氏の意匠に係るものにして、其製作も当地永澤信吉氏を助手として、主となる所は教師自ら技術を施し成功したるものなり、籠式菊花細工花瓶高さ一尺三寸余、胴径壹尺計、形状は三ツ耳瓶子形純白磁器にして全体悉く籠目を以て之を蔽ひ、其中間即ち胴の所五、六寸計を峰腰状に凹ませ、写生的菊花数種を取交せて其周囲に配置せり(以下省略)

上記から当時、友田安清がデザインし、当地の技術者、職人を助手にして作品の製作を行っ

ていたことがわかる。今回紹介した作品についても友田安清がデザインし、当地の技術者、職人を助手にして製作したのだろう。

永澤信吉とは盈進社の生徒の一人で、明治期を代表する名工のひとりである。明治40年(1907)に独立し、出石に開窯する。

友田安清の写生帳についてもふれておきたい。明治20年代前半の友田安清の写生帳が残っており、そこには風景、動植物のスケッチや西洋絵画の模写などが描かれている(写真4)。この写生帳に描かれているスケッチをもとにデザインしたと思われる作品が出石に現存することから、友田安清はこの写生帳を参考にして美術作品の製作をしたと考えられる。しかし、今回紹介した花瓶のデザインのもとになったスケッチなどはこの写生帳にはみられない。



写真4 写生帳(個人蔵)

6 本作品と明治期の出石焼

明治初期の盈進社時代には籠目状の器形の作品がよくみられる。今回紹介した花瓶も籠目状の器形で、盈進社時代の作品を彷彿させる作品である。この花瓶から盈進社時代につくられていた精緻巧妙な作品が明治末期頃までつくられていたこと、また、籠目状の器形は明治期においての出石焼の特色のひとつであるということがわかった。

今回、明治32年から38年頃、友田安清によって製作された籠目小鳥細工花瓶を紹介したが、このような作品は今後も発見され、出石焼の歴史がさらに明らかになるだろう。今後とも、出石焼について調査を進めていきたい。

<引用・参考文献>

- 岡本久彦編、『但馬のやきもの』、船田企画、1984
- 出石町但馬会編、『出石・但馬雑誌』1号～10号、臨川書店、1985
- 松本佐太郎、『定本九谷』、宝雲舎、1940

文学研究科博士課程前期課程在学

大阪の都市遺産と住友

～中之島図書館と住友文庫をめぐって～

岩 田 陽 子

関西大学大阪都市遺産研究センターは、平成22年度、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択されたプロジェクトで、大阪の社会・文化景観を史的に分析し、その継承・発展・発信を目指している。

本年度、当センターは大阪府立中央図書館、住友史料館の協力のもと、大阪府立中之島図書館と共催で、平成24年度特別展とフォーラム「大阪の都市遺産と住友～中之島図書館と住友文庫をめぐって～」を開催した。

展示会場となった中之島図書館文芸ホールには、平成24年6月26日から7月6日の会期中、のべ1539名もの方が来場し、フォーラムには、ホールを埋め尽くす122名の方が参加した。中之島図書館は大阪の文化を象徴する存在であり、大阪に拠点を置いた「住友」との関係に高い関心が寄せられた結果といえるであろう。



フォーラム会場

大阪図書館（現・中之島図書館）は明治37（1904）年3月1日に開館した。昭和49（1974）年に、建物は国の重要文化財に指定されており、



建館寄附記

玄関ホールの中央階段上には第15代住友吉左衛門友純の「建館寄附記」と大正11（1922）年の「増築寄附記」の銅板額が掲げられている。

第15代住友吉左衛門友純について『住友春翠』（昭和30年3月）では「住友吉左衛門友親の女満壽に配して住友の嗣となり、翌26年に住友家第15代を襲ぐと共

に、隆磨の稱を改めて吉左衛門を稱へ、友純を名告つた」、「美術館の保存資金として、マーシャル・フィールドという富豪が百万弗を寄付したことを聞いた」と記している。大阪で銅貿易商として名を成した住友家に公家である徳大寺家から入った彼は、外遊先のアメリカで富豪が寄付したという美術館に感銘を受け、明治から大正にかけて数次にわたり、建物並びに図書購入基金を寄付したのである。

本展では、図書館の創立に関わった第15代住友吉左衛門や初代館長今井貫一に迫り、住友家から寄贈された資料や建築物、中之島地区の景観変遷を紹介した。



展示会場

第15代住友吉左衛門から寄贈された資料を詳しくみると、現在、中之島図書館の所蔵資料の中には、「大阪図書館」が「大阪府立図書館」に名称を改めた明治39（1906）年に贈られた「崎陽諏訪明神祭祀図」「朝儀図巻」「延享年間朝鮮来聘使図」といった絵巻もの他に、歌書や漢籍を特徴とする徳大寺家の蔵書や、蘭書・長崎物といった住友本店に由来するもの、住友家の家内向きの古典籍などがある。

さらに、大正11年の増築時には、現在、「住

友文庫」といわれている理化学系の洋書が寄贈された。それらは、現在、大阪府立中央図書館に所蔵されており、単行本約8900冊、学術雑誌約9200冊、学位論文の合本1000冊以上、そして21箱に納められた未製本の論文抜き刷りやパンフレット類である。現在、当センターは、眠っていた学位論文群を分類し、目録を作成する作業に取り組んでいる。

このように、住友家は建物や資金とともに、日本の古典籍、最新の西洋知識と幅広い蔵書を提供したのである。本展では、上記で紹介したような資料が住友史料館、大阪府立中央図書館、中之島図書館、当センターから約60点が出展された。詳細については、当センターが発行した図録を参照されたい。

また、会期中、記念室が公開され、7月7日のフォーラムでは、現在は使用されていない正面玄関の扉が特別に開放され、参会者から歓声があがった。今回の特別展は、文芸ホールに展示された資料だけでなく、第15代住友吉左衛門が寄付した中之島図書館の外観や内装をあわせて展覧できる絶好の機会であったといえる。



記念室



正面玄関

初代館長に着任した今井貫一が、「準備期の蔵書収集、目録作成をはじめ、すべての事務を

担い」(『中之島百年』平成16年2月)、収集した図書の展覧会を定期的に開催したことは展示された『図書館日誌』からもうかがい知ることが出来る。

明治37(1904)年5月に開催された「大阪図書館第1回図書展覧会」の「列品目録」には、住友吉左衛門をはじめ、数10名の蔵書家が名を連ねている。今回の展示では「列品目録」とともに、「住友吉左衛門君出品」として記されている『和蘭貨幣史』や『日本紀事』も陳列した。100年以上前に中之島図書館が住友家から受け入れ、第1回展覧会で公開した資料が、再び展示ケースに並んだのである。中之島図書館は寄贈された図書を保存し、展示するという美術館の母体となるような役割を永く担ってきたといえるであろう。



大阪府立中之島図書館

展示期間を通して、当センターが実施したアンケート「中之島の思い出」には、「中学生の頃から利用している」「司書資格を取るために、ここで実習した」「中之島は大阪らしさを残しており、市民の憩いの場」「文化財級の建物が、普通に図書館として利用されているところに、大阪人の誇りがある」というような多くの言葉がよせられた。100年余りの歳月、中之島図書館はかわらず、その時代を生きる人々に親しみをもって、愛されてきたのである。

本展の開催が実現したことは、中之島図書館が将来にわたって文化遺産を保存し公開していく施設となるよう、先人たちがその基盤を作り、それを守り続けてきた人々がいたという証でもある。

大阪都市遺産研究センター研究員
文学研究科博士課程後期課程在学

国府遺跡大串第18号人骨と縄文鉢形土器の穿孔

—考古学における相同性と相似性—

山口 卓也

1. 考古学における相同性と相似性

19世紀から科学としての体裁を整えた考古学は、「地層累重の法則」や技術形態学的分類法など基本的な研究手法の段階で、自然分野の諸科学から多く解釈のための原理を借用してきた。「相同と相似」という概念も、しばしば潜在的に応用されている。

進化生物学における系統発生と個体発生において、生物の持つある構造が共通の祖先から生じた場合、「相同性がある」または「相同である」といい、そのような器官を「相同器官」という。共通祖先を持たない類似性は「相似性」と呼ばれる。例えば、昆虫類の「翅」と蝙蝠の「翼」、鳥の「翼」は、それぞれ形態的・機能的には「相似する」「相似器官」と呼ばれ、進化的には異なる系統であったため、「相同ではない」と表される。相似的な構造は、それぞれ種として異なる経路で進化する過程があったにも関わらず、異なる由来の器官が同じ機能を持つように進化した証拠であり、これは「相似器官への収斂進化」と呼ばれる。

国府遺跡大串第18号人骨に伴って発掘された重要文化財指定縄文鉢形土器は、平成18年度に修復を行ったが、この時、土器の底部に穿孔があったことが判明した。ここでは、この縄文鉢形土器底部の穿孔と国府遺跡の大串第18号人骨の出土状態を、発掘調査当時の状況を踏まえながら、その埋葬状況を再検討し、考古学における「相同性と相似性」という事例に言及してみたい。

2. 大串第18号人骨と縄文鉢形土器

大串第18号人骨は、ほぼ全身の骨格が残った屈葬で、頭部を東南東に向ける。頭部に縄文土器破片10片を被せ、玦状耳飾が付随する。遺体の胸上に穿孔のある鉢形土器を乗せる。

胸部左右に長幅20cm余、厚5~7cmほどの花崗岩自然石があり、頭部に土器破片、胸部に石と鉢形土器の両方が置かれた状態で、いわば「覆鉢・抱石葬」と呼称できる状態である。縄文期の遺構面が大規模に削平されていること、人骨周辺がく

ぼんで発掘され、埋土の色調も異なることから、墓穴の底部が残存していると推定される。成人男性の人骨である可能性が高い(池田次郎 1988)。大串18号人骨は、土器の副葬、覆鉢・抱石葬で、玦状耳飾を装着することから、縄文前期埋葬の中で例外的な「厚葬」として有名である。

大阪毎日新聞大正7年8月17日、岩井擁南「河内国府第四回発掘調査(九)A地域の人骨」に、破片を接合したという記載があることから、発掘時には破損状態であった鉢形土器を復元して完形にし、さらに人骨周辺を整えてから写真撮影したことが判明している。ここからは、縄文鉢形土器に穿孔があり、破片だった土器を復元してから撮った写真であるという従来知られなかった事実を踏まえて考えてみたい。

頭部に付着する非接合縄文土器片とは異なり、この縄文鉢形土器は、一括して一個体分の破片が出土したものである。発掘時に容易に復元されているので、飛び散った状態ではなく、一か所で押し潰された(圧壊)状態であった可能性が高い。写真にあるように、顎骨と胸部の間で検出したのだろう。

人骨の頭部から胸部にかけての部分に、非接合縄文土器片と、この圧壊した縄文鉢形土器、左耳玦状耳飾などが密集した状態だったことになるが、どれも頭骨上ではなく、顎から顎部や手前の下位の位置に検出されている。

この発掘時の状況を、真上から見下ろせば、



図1 国府遺跡大串第18号人骨と縄文鉢形土器(破片となつて出土したが、復元されて完形状態である。)

非接合縄文土器片は、頭骨上から手前下の方に、「滑り落ちた」状況にあるように観察される。块状耳飾についても、横臥した頭部の左耳朶から、やはり同じように滑り落ちた状態にみえる。全体として、大串第18号人骨は、墓穴中の土圧や後世の人為的な圧迫で縄文鉢形土器の圧壊が生じ、そのほかの遺物も本来の位置から下位へ移動している可能性を指摘したい。写真中の人骨手前の抱石も、移動の可能性がある。

3. 大串第18号人骨の埋葬

それでは、本来の大串第18号人骨の埋葬は、どのようなものと考えたらよいだろうか。頭部に土器破片、胸部に石が置かれた状態で、「覆鉢・抱石葬」と呼称できる状態に復元されることには変わらないが、穿孔のある縄文鉢形土器の本来の位置は頸部から頸部付近ではなく、完形のまま頭骨上にあったと推測する。



図2
縄文鉢形土器
底部の穿孔

この穿孔のある縄文鉢形土器は、穴を穿つという点で、縄文時代埋葬習俗との関連が指摘できる。その年代から、埋葬の発現期として位置付けが可能である。縄文時代埋葬では逆置埋設が広く行われるので、第18号人骨上のこの土器も逆置であった可能性が考えられる。この場合、屈葬された遺体の頭部に、鉢形土器を逆さにして被せ、土器内に埋土が充填されない場合には、煙突のような「気道」として設置されたという高度に構築された「遺構複合」が復元できるのではなかろうか。この復元は、埋葬人骨と組み合わさった縄文期埋葬例が希少であるので、現時点では考古学的「単一」事例であるに留まる。進化生物学の「突然変異体」、種として固定される途上の個体例に相当するだろう。

広く事例を探せば、ここで詳述しないが、北海道のオホーツク文化の埋葬にきわめて似た埋葬例がある。オホーツク文化は、オホーツク海



図3 北海道網走市モヨロ貝塚（モヨロ貝塚館）の埋葬検出面（逆置された土器の底部穿孔が見える。）

岸を中心とする北海道北海岸、樺太、南千島の沿海部で、海獣狩猟や漁労を中心とした文化である。北海道に分布している遺跡の年代は5世紀から9世紀までと推定されており、近畿地方の縄文時代前期の国府遺跡大串第18号人骨の埋葬とは、時空が隔たっている。両者の間は、考古学的解釈原理上は「無関係」であり、進化生物学のいう「相同性のない」「相似性のある」現象を認めることができる。

このような相似例は、人的存在である行為者が、人の「死」という人類共通の出来事に、自身の精神活動として対応したという共通の根源をもちながら、それぞれに発生した現象であるといえよう。人的行為としては、「死を巡る普遍的な行為」の結果である。これが考古学的に検出されたものが、それぞれ事例として把握されているのだが、根源的な段階では「収斂進化」を認めることができるであろうか。紙面を改めて、再論してみたい。



図4 北海道網走市モヨロ貝塚（モヨロ貝塚館）の屈葬（頭部上に逆置土器が被されるが、この土器の底部あたりに墓穴の遺構面がある。）

博物館学芸員

平成24年度全国大学博物館学講座協議会 全国大会の開催について

平成24年6月23日（土）と6月24日（日）、関西大学千里山キャンパス等を会場として、平成24年度全国大学博物館学講座協議会全国大会が開催された。この全国大学博物館学講座協議会（以下全博協）は、各大学で開講している博物館学講座または課程に関して協議し、博物館学教育の研究および振興に寄与することを目的として設立された会であり、平成23年3月の時点で、全国の博物館学講座または課程をおく344大学のうち183校が加盟している。今年度の大会には、全国から78大学137名の課程担当の教員と職員の参加があった。

関西大学の博物館学課程は、昭和36（1961）年に開設され、昨年50周年を迎えた。創設時の教員は末永雅雄教授、横田健一教授で、同年、全博協に加盟した。そのあと網干善教教授、小野勝年講師（奈良国立博物館）や各地の博物館園、研究機関の現役学芸員、研究員の助力で運営を続けている。網干教授が中心となって、昭和55年から平成8年まで、全博協関西（現西日本）部会会長校に就任している。昭和57年から平成5年まで、全博協の委員長校に就任した。この間、関西大学を会場として、昭和54年に全国大会を、昭和53年・62年、平成9年に関西（西日本）部会総会を開催している。本全国大会は33年ぶりの開催である。

博物館学課程は、博物館・美術館などで資料の蒐集と保管、展示と普及、教育と研究に従事する高度専門職である学芸員を養成する課程で



図2 講演風景

あり、資格を取得するためには、大学で開講する所定の単位を修得することが必須となっている。平成24年度から必修単位の拡充が行われたこともあり、各大学の取り組みやカリキュラムの編成についての情報交換も期待される大会となった。

6月23日（土）には、関西大学千里山キャンパス千里ホールを会場として、総会および研修会、24日（日）には、大阪市内の施設見学研修会が開催された。

研修会では、博物館や文化財保護をめぐる問題をテーマとした講演とフォーラムが行われた。

京都国立博物館副館長の栗原祐司氏からは、「文化財レスキューと大学博物館の果たすべき役割」と題した講演があり、昨年3月の東日本大震災に起因する各地の被災文化財のレスキューの現状が紹介された。栗原氏は、レスキュー



図1 高松塚の四神着ぐるみがお出迎え



図3 フォーラムの風景



図4 関西大学博物館見学

に取り組む各地の文化財公開施設、研究機関、行政機関と連携して、大学の博物館学課程、文化財保存関係課程、さらには大学博物館も、積極的に役割を果たしていくべきであると述べられた。

本学博物館前館長の高橋隆博教授からは、「明治初期の文化財をめぐる動向」と題した講演があり、明治期での神仏分離令による文化財の受難、特に奈良を中心とした被害への反省から、明治4年の町田久成らによる「大学献言」、明治政府の「太政官布告」により初めて文化財の保護がはかられ、明治5年には文部省が古社寺調査を行ったことや、その際の正倉院開封についても紹介があった。さらに、明治8・9年に東大寺を会場とした奈良博覧会が開催され、奈良の古社寺の文化財、特に正倉院御物、宝物の公開が、後に文部省が博物館建設を進める重要な契機となったことを述べられた。

「大阪の公立博物館の現状」と題したフォーラムでは、最初に座長の本学博物館学課程代表、米田文孝教授から、大阪の公立博物館・美術館・園をめぐる最近の行政による改革・再編の計画や、成果を性急に求める動きへの危惧などの問題提起があった。続いて、大阪歴史博物館運営課長の文珠省三氏からは、大阪歴史博物館の沿革と活動の報告、大阪府文化財センター主査で元大阪府立弥生文化博物館学芸員の合田幸美氏からは、弥生文化博物館の最近5年間の運営についての詳細な説明と、平成20年度から求められている「成果」、特に「博物館 in school」や「どこでも博物館」などの事業について報告があった。フォーラムでは、博物館を支える行政や地域社会とのかかわり方が、大阪の地で急



図5 施設見学研修会（適塾）

速に大きく変わりつつあることが示され、全博協大会参加者に深い印象を残した。また、講演とフォーラムには、関西大学の博物館実習履修者多数の聴講があった。

プログラム終了後、関西大学博物館の見学と情報交換会が行われた。

6月24日の第2日は、関西大学環境都市工学部の橋寺知子准教授、岡絵里子准教授が引率して、施設見学研修会「水都大阪の景観と文化施設」を行った。JR新大阪駅に集合しバスで移動、大阪中之島周辺の歴史的建造物、施設を踏査した。中之島の街並み、個々の建物が文化財としての価値を維持している現場を巡検して、歴史的背景を持って形成された街並みや景観も一種の博物館的空間であることを確かめた。参加者からは、変化の速い大阪中心部で、歴史的文化的建造物が今も残存していることに、感嘆の声が聞かれた。この後、水上バスに乗船して大川から都市景観を調査し、さらに、橋梁や砲兵工廠跡に残る大坂城石垣なども観察した。昼食後は、旧藤田男爵邸庭園、大阪歴史博物館などを見学した。

関西大学の博物館学課程は、50年余りの歴史を有し、多くの課程修了者を出してきた。博物館、美術館、各種館園で学芸員を務める者、文化財研究機関、行政機関等で専門的業務にあたる者も多い。今回の全博協全国大会を本学で開催し、全国の博物館学教育に携わる教員、職員が集って、研修と情報交換を行えたことは貴重な機会であり、それを本学博物館学課程のさらなる発展の糧としていきたい。

（山口）

◆ 博物館だより

◇平成 23 年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	26	24	27	4	0	1	18	25	19	2	9	25	180
入館者数	1,720	1,700	592	253	0	20	562	1,467	286	40	193	663	7,496

◇春季企画展として「東洋のやきもの」と「南部靖之氏寄贈 古硯と古墨」の2つの展示会を4月1日から6月30日まで開催し、5,031名のかたにご観覧いただきました。「東洋のやきもの」では本館がこれまで蒐集してきた日本49点、朝鮮7点、中国20点の陶磁器を展示しました。ご来館頂きましたかたがたに厚くお礼申し上げます。



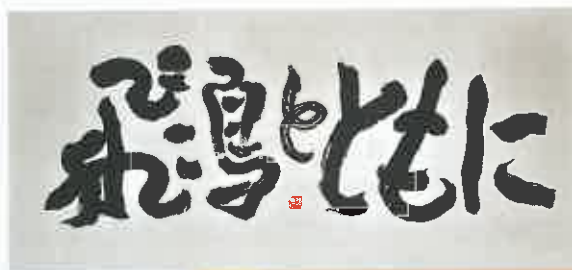
◇博物館なんでも相談会を8月6日と7日に実施しました。学外からは丹波市、



氷上西高校、福井県、弥生文化博物館、紀伊國屋書店、本学からは地域連携センター、ポランティアセンター、図書館、

考古学研究室、鉄道研究会の参加があり、他団体・機関の協力を得ての開催もすっきり定着しました。2日間で1,148人の皆さんに楽しんでいただきました。

◇9月10日から29日まで「高松塚古墳発掘40周年 万葉書作家 鈴木葩光 書家60周年 記念特別展 飛鳥とともに」を開催しました。鈴木葩光氏の作品は、関西大学の考古学と飛鳥の地の関わりを表したものも多く、万葉古歌の書を通して飛鳥人、高松塚古墳の精髓に迫りました。会期中677名の皆さまにご覧いただきました。



。 。 。 編集後記 。 。 。

表紙は、カヌー舳先の飾板でニューギニア東南部地方に多い鳥とワニの結合様式の「波きり」です。ワガワガ地方産のものと推察されます。

本年度上半期に大谷渡先生(本学文学部教授)から刀剣3振、片山直樹様から「出羽行廣」銘の日本刀をご寄贈いただきました。また、本学校友の遠山慶一様からは四国松山藩に仕えた遠山家伝来の松山城下絵図と江戸上屋敷絵図、同じく校友の根岸隆様からは先祖伝来の真心影流の兵法目録など幕末動乱期の資料10点のご寄贈がありました。今後、博物館で充分活用していきたいと考えています。



さて、詳細は本紙にて報告しておりますが、6月に全国大学博物館学講座協議会の全国大会を本学で開催しました。昭和54年(1979)開催以来33年ぶりの全国大会招致でしたが、大阪の特色を出した関西大学らしいお迎えをしないと、随分前から検討を重ねた甲斐があり、当日皆さんに喜んでいただけたようです。

平成24年4月から高橋隆博本学名誉教授の後任として、薮田 貫文学部教授が博物館長に就任いたしました。前館長同様、ご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。